

〔研究論文〕

大正期の雑誌『オペラ』及び『オペラ評論』の出版状況について

中津川祥子

はじめに

『オペラ』は、1920（大正9）～1924（同13）年に活動倶楽部社（後に「活動社」）により出版されていた雑誌である。1919年には『オペラ評論』（活動評論社刊。活動評論社は後に改称して活動倶楽部社となる）と、『オペラ』という名の雑誌がもう一つあり（「編集兼発行人」は奥田信太郎氏、「発行所」はオペラ社。以下奥田『オペラ』とする）、翌年この二誌が合併し『オペラ』として出版された。合併後、出版は『オペラ評論』に携わっていた人々が行い、誌上には奥田『オペラ』に携わった人々の名は見られない。現在この奥田『オペラ』、『オペラ評論』、そして『オペラ』は合本化^{※1}され池田文庫（大阪府池田市）において閲覧できる。しかしその内容については、一部の文献^{※2}に言及がみられるものの、あまり触れられてこなかった。

そこで今回はこの奥田『オペラ』、『オペラ評論』、『オペラ』を出版した側に着目し、いくつか項目を設け内容を整理した。それらを通して当時のオペラを支えるツールとしてどのような役割を果たしたのかを考察する。編集者名は読者投稿ページと編集後記から抽出した。編集者自身が記事を書くこともあったが、編集と記事の両方を担当している編集者数が少ないこと、また今回は出版側に注目しているためあくまで出版している側の立場を優先させたいことから、「編集者」として統一した。

1. 奥田『オペラ』

合本で確認できた最古の奥田『オペラ』は1919年5月号だが、これは創刊号ではない。しかし同年7月号目次に「第4号」とあることから、遡ると創刊号である第1号は4月号ということになる。一方、最終号は合本では10月号以降を欠いているため、正確には何月号なのかを知る手だてはない。合本で確認できた9月号には廃刊を窺わせるような文面は見当たらないため、この後も出版は続いていたのだろう。また、奥田『オペラ』と『オペラ評論』の合併が『オペラ評論』11月号にて「雑誌『オペラ』が次號以後に於て、本誌『オペラ評論』と合同して、尚従前通り、本社から發行せられる事になつたことを謹んで申し上げます」（p.92. 原文ママ）と発表されていることから、奥田『オペラ』は少なくとも11月号までは出版されていたと考えられる。12月号の出版はあったのかはいずれにせよ奥田『オペラ』の出版は1919年に留まり、奥田信太郎以下編集者達の名は合併以降の『オペラ』中に見つけることは出来ない。彼らは合併を機に『オペラ』の出版から離れたとも言えよう。以下、奥田『オペラ』について述べる。表1を参照されたい。

奥田『オペラ』はB6サイズの雑誌で、創刊号と思われる4月号から9月号までは月一回のペースで出版されている。6月号以降の奥付には「毎月一回一日発行」とあるが、読者からの投稿に「どうしてオペラの発行はこんなにおそいのですか。他の雑誌は皆十五日前に出るではありませんか（中略）私何時も二十日過ぎになりますと本屋へお百度をふみますのよ（後略）」（9月号 p.120. 原文ママ）とあることから、発売は月末になることもあったようだ。「発行兼編集人」は奥田信太郎、「発行所」はオペラ社であり、これに変更はなかったが、「印刷人」と「印刷所」は7月号に一度変更されている。同号でのこの変更への言及は見られない。しかし翌8月号の編集後記「ソファによりて」において「遺憾なのは振假名を全體に亘つてつけることが出来なかつたのです、どうも印刷所の方でいつも間ごつくものですから」（p.128. 原文ママ）とあり、変更後も印刷所に編集者の思うとおりの仕事を頼むことはできなかったようである。

値段は、9月号でそれまでの30銭から45銭に引き上げられた。同年では『中央公論』は40銭、『週刊朝日』が1921年に10銭、公務員の初任給が1918年で70円であった（週刊朝日【編】1981、1982）。45銭という値段設定について奥付には「本誌に限り」と但し書きがあるが、5月号以外の奥付には、「臨時増大號は別に増額を申受けます」との断りがあり、また8月号中で10月号は「特別倍大號」とすることが予告されている（p.128.）。したがって10月号で再び値段が30銭に戻ったとは考えにくい。ここでの値上げは、9月号中で「種々の點で思ひがけなくかゝつた」と説明されていること（p.125.）、同時期に出版されていた『オペラ評論』も同年10月号では35銭に値上げされていることから考えると、当時は避けられなかったものと言えよう。

編集者について、表1の「応答あり（なし）記載あり（なし）」とは、「歌劇葉書通信」等で編集者からの応答がある（ない）こと、編集者名の記載がある（ない）ことをさす。8月号中の「暑中お伺ひ」として10人の名前が見られる他は、峯本氏・橋口氏を除き氏名の明記はない。読者からの投稿にも、特定の編集者を名指しするような投稿はあまり見受けられない。投稿欄中であまり明記されていないのだから名指ししにくかったのは当然だが、編集者の氏名が頻繁に載り、読者も名指して呼びかける投稿が多い『オペラ』と比較すると、読者に対して少々閉鎖的な印象を受ける。なお、編集部への出入りに着目すると、5~9月号中で明らかにされているのは木村一平氏と九里港星氏の退社だけであり、新メンバーの加入に関する報告等は見られない。

2. 『オペラ評論』

『オペラ評論』の創刊号は、奥田『オペラ』より2カ月遅い1919年6月号である。この創刊は、同じく活動評論社から出版されていた映画雑誌『活動評論』1919年5月号において「御挨拶まで 新雑誌『オペラ評論』生る」と題して紹介されている（森：1919：36-37. 及び牧野：1992a：336-337. 原文ママ）。雑誌のタイトルについて「『とにかく家の雑誌なんだろう』と判り切ったことを聞いた奴がありました。（中略）『ぢやオペラ評論とするさ』と無造作に答へたものです。（中略）本誌の繁栄にもあやかられて、幸先もいゝだらうと、早速それに定まつてしまったのです」（森：1919：37. 及び牧野：1992a：337. 原文ママ）とあり、『活動評論』との関連を暗に示す狙いもあったようだ。

創刊号は合本には欠落しているが、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政資料センター（東京都文京区）に所蔵されている。奥田『オペラ』より2カ月遅れての出版開始であったが、奥田『オペラ』同様1919年にのみ出版され、B6サイズである。合本には創刊号の他、7月号、9月号が欠落している。以下、表2を参照されたい。

『オペラ評論』も月一回のペースで出版されている。「編集兼発行人」は森富太氏、「発行所」は活動評論社である。森氏は1920年に奥田『オペラ』と合併した後も「編集兼発行人」であった。「印刷人」は黒田彌一郎氏、「印刷所」は大國印刷株式会社である。「印刷人」は10月号で堀直江氏に変わっているが、「印刷所」に変更はない。

値段は30銭で始め、10月号からは35銭に値上げしている。10月号中で「お断り」として、「戦争が済んでも、相變らずの紙價暴騰です（中略）それで各雑誌とも困つた末、東京雑誌組合で、各雑誌一般に値上げといふことを決議しました（後略）」（10月号p. 91. 原文ママ。ふり仮名は省略）と述べられ、組合の決定上、『オペラ評論』のみ値上げしないわけにはいかなかった旨を主張している。既に述べた奥田『オペラ』の値上げがこの組合の決定と関連しているかは明確ではないが、少なくともここで述べられている「紙價暴騰」の影響はあろう。なお奥田『オペラ』は創刊から徐々にページ数を増やし、9月号では5月号より10ページ増の128ページとなっていることに対し、『オペラ評論』は値上げ前も後も総ページ数が112ページであった²⁸。ページ数が変わらないのに値段が上昇していることになるが、それについて読者からの拒否反応は見られない。

編集者の名は雑誌内で明らかにされている。表2中の「読者通信」とは読者の投稿ページであり、「報告書一束」や「編輯室のボード」「ラクガキ・ボード」では編集者から読者に向けてのメッセージや編集者同士のやりとりが掲載されている。編集者のやりとりの描写は奥田『オペラ』では見られなかったものであり、お互いに冗談を言い合うさまは、編集者同士の仲の良さを読者に伝えている。このコーナーは長くは続かなかったが、このように編集者たちの様子をオープンにしたこと、また編集者個人名を掲載したことで、読者に『オペラ評論』出版側への近しさを感じさせることが出来たのではないだろうか。『オペラ評論』ではあまり見

られないが、『オペラ』では編集者個人に対する呼びかけから始まる投稿が多い。活動倶楽部社のメンバーへの距離の短さは『オペラ評論』時代から読者に伝わっていたと考える。

3. 『オペラ』

既述のように奥田『オペラ』と『オペラ評論』は合併し、1920年1月号より『オペラ』として新たに出版されることになった。『オペラ評論』11月号ではその告知と同時に新しい名称が募集されている。『オペラ』1920年1月号にて全投票数703票のうち93票が新名称を『オペラ』とすることを支持していたことが発表されている（p.86.）。このように、合併後も名称が『オペラ』となったのは、読者の要望に合わせる一方、「オペラというのが最もポプラーな意味に於いても趣味と研究とを主とする本誌には應はしいと思はれる」（同頁、原文ママ）とあるように雑誌の内容に鑑みてであって奥田『オペラ』の関係者たちが残ったからではなかった。以下、表3を参照されたい。

出版のペースは、1923年の9月号まで月1回のペースを守っている。しかし同年9月1日に関東大震災が起り、社は無事だったものの印刷所が倒壊し10月号は休刊となった。11月号で一度復活したものの、翌12月号から翌年5月号まで休刊している。休刊については1924年6月号において「昨年の十一月より今迄休刊して居た」（p.30. 原文ママ）と述べられている。また合本には7月号までしか収録されていないが、同号には懸賞原稿の募集があったり、編集後記で「これからますますの充実を図っていく」と決意が述べられたりしている（p.56.）ことから、この時点では少なくとも出版存続の意志はあったのだろう。

一方で1923年の7月号は一度出版したものの後に発禁処分を受けている。それについて、翌8月号中で社長森氏は「前号発売禁止について」として説明に1ページを割き、当局の目に触れたので問題とされた箇所を除いて改訂版として発行したと述べている。ここでは理由は詳しく説明されていないが、同号の「オペラクラブ」のなかで、「なぜ禁止になったのか」という読者からの質問に当時の編集長東武朗氏は「あるオペラ女優の告白が風俗を乱すような記事だからでした」と答えている（p.84.）。これがどの記事を指し、具体的にはどのような内容だったのか確認したいが、池田文庫にあるものは改訂版なのか、それらしい内容の記事は見つげられない。

さて、『オペラ』では、奥田『オペラ』や『オペラ評論』と異なり各号ごとにサブタイトルがつけられることも多かった。1920年4月号に初めて付けられて以降、1921年1月号まで、そして翌1922年から1923年2月号までは毎号についている。サブタイトルのある号は当然それに沿った内容を含むが、程度の差こそあれ、必ずしもそれに関連した記事ばかりが載っているわけではなかった。それらは、読者投稿ページや東京以外の地域の公演情報、現行の歌劇に対する意見等毎号掲載されているものと並び掲載されるに留まっている号もあった。

「発行兼編集人」は森富太氏である。「発行所」は1920年11月号で一度場所を変えており、

1923年7月号よりそれまでの活動倶楽部社から活動社に名称を変えている。「印刷所」は変わらず博文館印刷所だが、「印刷人」は23年3月と同年7月の二度、変わっている。

値段は40銭で始まり、1920年7月号で50銭に上がっている。その後1921年1月号、11月号では70銭、1922年1月号が1円になっている他は、1923年11月号までは50銭でキープされている。特別号や増大号では値段を上げていたが、震災後はページ数も減り、30銭となっている。

編集者名は読者投稿欄「オペラクラブ」及び編集者の挨拶のある「編集室から」から抽出した。初出のみフルネーム、初出以降は名字のみで表記している。初出であるにもかかわらず名字のないものは、雑誌内でそうとしか述べられていなかったことを示す。編集者名はほとんどファーストネームのみの表記であった。

表中、プラス記号は編集への加入を、そしてマイナス記号は逆に編集から外れたことを意味する。外れ方には二通りあり、一つはやりたいこと等があるために読者や編集者に見送られる形で編集部を去ったパターンである。これには貌興太平氏と桐野葉二氏があたり、二人とも去る号でお別れの言葉を述べるスペースを与えられている。もう一つは、「今後は私たちと一切関係ない」という囲み記事が載せられているだけに終わっているものである。これには泉洗郎氏や泉春樹氏があたる。理由は不明だが、その書かれ方からしてあまり穏やかな去り方とは言えないようだ。

表中、名を四角で囲ってある人物は、当時の編集者たちの中心となったことを示す。中心となったのは泉洗郎氏、貌興太平氏、東路国彦氏、前澤末彌氏、東武朗氏、佐藤春華氏の順だが、中心人物が変わった場合、殆どの場合で引き継いだ者が引継を明言している。東氏は『オペラ』と関係を断つことを表明した1923年11月号で、東武朗という名はペンネームであり、本名は伊東玉之助であることを告白している。同年11月号のオペラクラブ内にある名前は伊東と東のみなので、一人二役で読者投稿に答えていたことになる。また同年5月号には「球子」なる名もあるが、この名はこの後にも先にも見ないこともあり、伊東玉之助の本名をもじって作った架空の人物であった可能性も高い。

表3に挙げたとおり、編集者の名前は雑誌内で頻出している。「オペラクラブ」では編集者個人に対する呼びかけから始まる投稿が多く見受けられる。また編集者が歌劇俳優と喫茶店にいたという目撃情報が寄せられており、編集者もそれを事実と認めているが（『オペラ』1921年1月号p.102.）、これは編集者の顔を知らなければ出来ないことだろう。読者が編集者の顔を知ったきっかけは不明だが、読者と編集者との距離の近さがうかがえる。

また、『オペラ』では、大阪や名古屋などに支局があることが確認できる。表4では、雑誌内に登場した支局名とその担当者の名前をピックアップした。支局をつくることは『オペラ評論』12月号、合併告知ページでも発表され、同時に支部長が募集されている。各支局は「支局通信」という形で各地での歌劇団の公演情報や歌劇俳優の様子を報告しており、支局通信を見れば、その場所での様子が分かるようになっている。また、支局毎の読者投稿欄も設け、「オ

ペラクラブ」よりも狭い範囲で読者からの声を集めている。

合併後当初から見られるのは大阪支局である。初めに大阪支局を担当していた清水まつみ氏は1921年9月号で「京都へ支局を設ける」と発表している。清水氏がオペラ座へ入座し当分京都に住むことになったため、大阪支局は播島種郎氏が引き継いだ。大阪支局は初めは一つだったが、1922年2月号では日本橋支局、西区支局、南支局の3つの支局名が確認できる。そして同年の7月号で、「謹告」として大阪南支局の支部長泉澤悟郎氏と桐原春彦氏に対し「盡す處多大なるを認め、今後大阪支社と改稱すると共に大阪支局全部の總括を命ず」（p.59.）と、大阪支局を束ねるよう命じている。同号58頁に「大阪南支局改稱大阪支社は先頃同社開設記念として（中略）月極講讀者を募集した。申込者實に數百に達するの盛況であつた」とある。

「盡す處多大なる」とは購讀者を増加させたことを指したのだろうか。この二人は大阪南支局支部長に就任した際「新大阪支局開設について」と題し、自分たちは『オペラ』愛讀者であり愛讀者級の頭脳しか持たないので、音楽や歌劇については専門的な理解力や批判力を持っている批評家ではない、とあくまで『オペラ』愛讀者の歌劇愛好家であることを主張している（同年3月号p.36-37.）。この二人が任された大阪支局はその後さらに発展し、1923年7月号には関西支局創設が発表されている。支部長には本社の丸山京太郎を任じ、6月中旬に大阪に創設する、としている。京都支局や名古屋支局、神戸支局という大阪以外の支社がここにまとめられたとも考えられる。

さて、この支部長は「歌劇に興味を有し、中等程度以上の学力を有する」との条件下で募集された。つまり支部長については広く一般公募の形をとり、もともといた編集者が支部長になったというわけではなかったということだ。大阪支局を任された二人が、支部長になる前どのようなことをしていたのかは明らかにされていない。しかしこの二人が大阪支局全部の統括を任されたということは、専門的な知識はないと自覚する歌劇好きの人間が、歌劇雑誌の支部長を経て、支社長にまでなったということだろう。森富太氏による活動俱樂部社は、社内にいた人材を各地に派遣して支局を増やしていったのではなく、歌劇好きの一般の人々を支部長に募集して任命し、各地での歌劇に関する情報を収集させていたのである。そして支局としての活動が活発であると認めた折には、より重要なポストを用意したのではないだろうか。情報収集できる地域には限りがあったものの、その情報を雑誌内に盛り込み、どの地域でどのような歌劇が上演されたか等歌劇に関する情報を広く読者に知らせ、情報の共有を可能にした。1922年3月号69ページ「謹告」の欄で明言されているように、「演劇、音楽、舞踊の民衆化を社會的に普及し宣傳する」（原文ママ）という目的で支局を開設し、歌劇好きだが専門家ではない人々を支部長として登用して東京以外の地域の情報も集めさせ、雑誌『オペラ』を通じて読者に発信するというこのやり方は、人々に歌劇をより身近に感じさせ、より多くの人に歌劇を浸透させるための一助力となったのではないだろうか。

まとめ

以上、本論文では奥田『オペラ』、『オペラ評論』、『オペラ』と順に見てきた。『オペラ評論』及び『オペラ』での、編集者名をファーストネームで頻出させ彼らの存在を明確にし、読者の呼びかけに応答するという態度が、読者へ親しみやすさを感じさせ、同時に歌劇もより身近にさせていたのではないだろうか。読者から支部長を選び各地の歌劇情報を集めさせるといういわば読者巻き添え型の編集方法も、『オペラ』及び歌劇の人々への浸透を促進していたと考える。また、今回は雑誌の内容までは踏み込むことができなかったが、前澤氏が編集長であったとき、自ら地方公演中の歌劇俳優に手紙を出し、彼らから届いた写真や地方での様子を書いた手紙を掲載していることもあった。読者は普段は目にすることのない歌劇俳優のプライベート写真を、誌上で見ることができたのである。『オペラ』が歌劇俳優と読者を繋いでいたのだ。

今回は出版側にのみ注目したが、今後は内容や読者にも目を向け、この三誌が果たした役割について考察を続けたい。

[注]

注1 奥田『オペラ』は1919年5～9月号、『オペラ評論』は1919年8月号及び10～12月号、『オペラ』は1920～1922年全号、1923年1～9月号及び11月号、1924年6,7月号が収録されている。

注2 増井1990、松本1981、大笹1986、渡辺1999。増井2003は『オペラ評論』にのみ言及がある。

注3 東京市日本橋区青物町16番地。

注4 東京市神田区美土代町2丁目1番地。

注5 東京市芝区櫻田太佐衛門町4番地。

注6 東京市下谷区南稻荷町31番地。

注7 東京市芝区南佐久間町1丁目3番地。

注8 創刊号のみ96ページ。

注9 表中「？」が付いている号は、奥付が欠落していることを示す。

注10 東京市下谷区南稻荷町31番地。

注11 東京市小石川区久堅町108番地。

注12 住所が東京市下谷区上野桜木町5番地へ移動する。

注13 個人名は1月号のみ「読者通信」、2月号以降は「オペラクラブ」より抽出した。

注14 泉洗郎のことか。

注15 社長森富太を筆頭に、以下の役職名と個人名がある。編輯主任：東路國彦、桐野葉二、獺興太郎、小生夢坊、芋塚太郎作、紅澤葉子、立澤成孝、片野暁詩、三谷芳明、清見絲子、緑川春之助、齋藤京之助、在米：平井鳳扇、大阪支局主任：清水まつみ。また、社友として伊庭孝、

竹内平、徳永政太郎、原田潤、田谷力三、高田雅夫、西本朝晴、石井漠の名前がある。この号のオペラクラブには桐野のみ名前がある。

注16 佐藤貞泉が改名した。

注17 泉春樹のことか。

注18 社長森富太を筆頭に、以下の役職名と個人名がある。主任：前澤末彌 齊藤京之助、江上浩々、枕井春秋、佐藤春華、藏田三作、松本静種、中川慶二。営業部：田中四郎、林太市。寫真部：森鷗水。廣告部：中井喜三郎、牛尾良策。大阪支局：播島種朗。名古屋支局：宮瀬草之助 紐育通信員：林嘉代子 京都通信員：井上朝鳥。また社友として伊庭考、貌興太平、西本朝春、大木雄三、加藤一夫、小生夢坊、佐藤惣之助、澤田柳吉、森田みね子の名がある。

注19 他に「叔父ちゃん」、「海坊主」などの名もあるが、読者の投稿内容から佐藤の自称と考えられる。

注20 清水まつみ氏はオペラ座へ入座し、京都へ移住することになったため。清水氏多忙につき、この時点ではまだ京都支局は設けられていない。

注21 京都「支局」とは名乗られていない。

注22 同号p.71.に「以前大阪の本社支局主任であった清水まつみ君は事情あって八月限り本誌と何等 関係の無いことになりました。其後任に從來同支局員であった播島種朗君が當たられ ます」とある。

注23 原文では「大坂西区支局」と表記されている。

注24 「舊支局」として掲載されている。

注25 福岡県小倉市。

注26 「幸ひに私たちの周圍に、十人ばかりの若い人たちを得ました」(p.79.)とあるとおり、支局のメンバーと思しき10人が写った写真も掲載されている。

注27 支局名は明記されていないが、酒井喜詩氏がまとめていることより判断。

[主要参考文献]

川崎 賢子 2005 『宝塚というユートピア』 東京：岩波書店。

牧野 守 (監修)

1992a 『日本映画初期資料集成10「活動評論」』 東京：三一書房。

1992b 『日本映画初期資料集成11「活動評論」「活動俱樂部第二卷八号～第十二号』 東京：三一書房。

1992c 「『活動評論』と『活動俱樂部』—小林喜三郎と『イントレランス』の時代—」. in 牧野

1992b 1992：1-27.

1992d 『日本映画初期資料集成12「活動俱樂部第三卷一号～四号」』 東京：三一書房。

増井 敬二 1990 『浅草オペラ物語 歴史、スター、上演記録のすべて』 東京：芸術現代社。

- 2003 『日本オペラ史 ～1952』 東京：水曜社。
- 松本 克平 1981 『私の古本大学』 東京：青英舎。
- 森 富太 1919 『活動評論』5月号 東京：活動評論社。
- 1920 『活動倶楽部』1月号 東京：活動倶楽部社。
- 大笹 吉雄 1986 『日本現代演劇史 大正・昭和初期篇』 東京：白水社。
- 週刊朝日（編）1981 『値段の明治大正昭和風俗史』 東京：朝日新聞社。
- 1981 『続 値段の明治大正昭和風俗史』 東京：朝日新聞社。
- 1982 『続続 値段の明治大正昭和風俗史』 東京：朝日新聞社。
- 渡辺 裕 1999 『宝塚歌劇の変容と日本近代』 東京：新書館。

なかつがわ さちこ

お茶の水女子大学卒業、同大学大学院博士前期課程修了（人文学）。現在、同大学大学院博士課程
在学中。声楽専攻。

【表1 奥田『オペラ』について】

(中津川作成)

年	月	発行兼編集人/発行所	印刷人/印刷所	値段	編集者
1919	5	奥田信太郎/オペラ社 ^{#3}	島連太郎/三秀舎 ^{#4}	30 銭	【歌劇楽書通信 p.111-116.】応答、及び言記載なし
	6	同上	同上	同上	【讀者端書通信 p.111-118.】応答あり、記載は橋口氏のみ ・木村一平氏…奥田氏から退社勧告を受ける (p.119.) ・九里港星氏…退社を申し出る (同上)
	7	同上	天沼登利/天 復英舎 ^{#5}	同上	【讀者端書通信 p.120-127.】応答あり、記載なし ・「オペラ主筆・峰本文路」とある (p.2.) / 木村氏退社 (p.126.)
	8	同上	同上	同上	【讀者端書通信 p.115-125.】応答あり、記載なし 【暑中お伺ひ p.92.】奥田信太郎 峯本文路 橋口李四郎 早藤日影草 小山初穂 歌村芳春 櫻町祐影 若葉春夫 川路青莉 チビ助八郎
	9	同上	同上	45 銭	【讀者端書通信 p.105-127.】応答あり、記載なし

【表2 『オペラ評論』について】

(中津川作成)

年	月	発行兼編集人/発行所	印刷人/印刷所	値段	編集者
1919	6	森富太/活動評論社 ^{#6}	黒田彌一郎/大國 印刷株式会社 ^{#7}	30 銭	【讀者通信 p.92-93.】応答あり、記載なし 【報告書一束 p.94-95.】春之助 仙之助 來三郎
	8	同上	同上	同上	【讀者通信 p.106-109.】応答あり、記載なし
	10	同上	堀道江/同上	35 銭	【編輯室のボード p.110-111.】仙之助 春之助 來三郎 絲子 草鳥 敵人 給仕 【ラクザギ・ボールド p.110-111.】仙之助 絲子 春之助 敵人 來三郎 草鳥 火 の鳥 笛四 M・P・R
	11	同上	同上	同上	【讀者通信 p.106-109.】応答あり、記載なし
	12	同上	同上	同上	【讀者通信 p.105-109.】応答・記載あり…來三郎 笛四 春之助 泉 染吉 【讀者通信 p.105-109.】応答・記載あり…泉 笛四 染吉 給仕

【表3 『オペラ』について】

(中津川)作成

年	月	サタイトル	発行兼編集人	印刷所	値段	編集者名	+	-
1920	1	なし	森富太 ⁹ 活 動倶楽部社	高橋賢治 ⁹ 博 文館印刷所 ⁹	40 銭	泉洗 ¹⁰ 、渡平吉、柴笛四、清見絳子、丹いね 子、久松染吉、給仕、光 ¹⁴		
	2	なし	森富太 ⁹ 動倶 楽部社 ¹⁰	高橋賢治 ⁹ 博 文館印刷所 ¹¹	40 銭	三田早鳥、久松、渡、泉、柴、茶目公、×× 子		
	3	なし	同上	同上	同上	水村静也、佃、渡、早鳥		泉、久松
	4	ローソンス號	同上	同上	同上	文雄、水村、渡		
	5	なし	同上	同上	50 銭	応答・記載なし	猿興太平	
	6	俳優告白號	同上?	同上?	同上?	同上		
	7	懋愛號	同上	同上	同上	応答あり・記載なし		
	8	樂屋夜話號	同上	同上	同上	同上		
	9	女優活話號	同上	同上	同上	芋塚太郎作、續		
	10	懋愛號	同上	同上	同上	立澤成孝、桐野葉二、芋塚、東路國彦	東路	猿
	11	俳優發展號	同上 ¹²	同上	同上	紅澤葉子、立澤、桐野、東路、鈴木、若樹、 青木		
	12	なし	同上	同上	同上	桐野、給仕、三谷芳明、片野琥詩	三谷、片野	
1921	1	新年特別號	同上	同上	70 銭	注 15		
	2	なし	同上	同上	50 銭	桐野		
	3	なし	同上	同上	同上	小生、齋藤、東路、桐野、片野、清見、佐藤 貞泉	佐藤、華影	
	4	なし	同上	同上	同上	佐藤、泉春樹、東路、桐野	S 吉	
	5	なし	同上	同上	同上	佐藤 ¹⁶		桐野
	6	なし	同上	同上	同上	佐藤、春木 ¹⁷ 、柴、東路、よも介		
	7	なし	同上	同上	同上	佐藤、東路、柴、泉、よも介、柴		
	8	なし	同上	同上	同上	三田、泉、柴、よも介		

年	月	サマタイム	発行兼編集人 発行所	印刷人 印刷所	値段	編集者名	+	-
1921	9	なし	森富大活動俱 楽部社?	高橋賢治/博文 館印刷所?	50 銭?	佐藤、 <u>前評</u> 澤木彌	<u>前評</u> 澤	泉
	10	なし	同上?	同上?	同上?	佐藤、 <u>前評</u> 澤、四方助		
	11	人気男女優號	同上	同上	70 銭	佐藤、 <u>前評</u> 澤		
	12	なし	同上	同上	50 銭	佐藤		
1922	1	民衆藝術研究號	同上	同上	1 円	注 18		
	2	俳優役々回演劇號	同上	同上	50 銭	佐藤、枕井		
	3	戀愛實話號	同上	同上	同上	佐藤、 <u>前評</u> 澤、枕井、藏田、齋藤、松本精利重		
	4	音楽奨励號	同上	同上	同上	佐藤		
	5	櫻花爛漫號	同上	同上	同上	佐藤		
	6	惱める青春號	同上	同上	同上	<u>前評</u> 澤、枕井、藏田、給仕、(佐藤) 注 19		
	7	愛と美と熱と力號	同上	同上	同上	<u>前評</u> 澤、枕井、藏田、齋藤		
	8	若き吾等の歡喜	同上	同上	同上	<u>前評</u> 澤、枕井、藏田、齋藤、佐藤		
	9	俳優に寄する公開状	同上	同上	同上	<u>前評</u> 澤、枕井、藏田、齋藤、給仕、俊郎		
	10	露西亞舞踏號	同上	同上	50 銭	齋藤、枕井、佐藤、俊郎		
	11	歌劇脚本便覧號	同上	同上	同上	齋藤、枕井、吳敏郎、松浦島舟	吳、松浦	
	12	おもひで號	同上	同上	同上	齋藤、枕井、吳、松浦		
1923	1	歌劇俳優俳優小傳號	同上	同上	同上	齋藤、枕井、吳、松浦、 <u>前評</u> 澤		
	2	踊り子の微笑號	同上	同上	同上	応答なし、記載なし		
	3	なし	同上	松浦政吉 : 同上	同上	齋藤、枕井、吳、松浦、 <u>前評</u> 澤		
	4	歌劇俳優と性的生活	同上	同上	同上	齋藤、枕井、吳、松浦、 <u>前評</u> 澤、給仕		<u>前評</u> 澤
	5	なし	同上	同上	50 銭	齋藤、枕井、松浦、給仕、 <u>東武朗</u> 、伊東玉之助、球子	<u>東</u>	

年	月	サブタイトル	発行兼編集人	印刷所	値段	編集者名	+	-
1923	6	なし	森富太活動倶楽部社	高橋賢治/博文館印刷所	同上	伊東、 <u>東</u> 、給仕、葉山哀歌、編集小僧		松浦
	7	なし	同上：活動社	郡重：同上	同上	伊東、 <u>東</u> 、葉山、編集小僧、荒木庸子	荒木	
	8	なし	同上	同上	同上	伊東、 <u>東</u> 、葉山、編集小僧、藤巻三郎	藤巻	荒木
	9	なし	同上	同上	同上	伊東、 <u>東</u> 、編集小僧、藤巻		
	11	なし	同上	同上	30 銭	伊東、 <u>東</u>		
1924	6	復活號	同上	同上	同上	佐藤、高屋虹路、宮城浪人、小川紫光		<u>東</u>
	7	なし	同上	同上	同上	<u>佐藤</u> 、高屋		

【表4 支局について】

(中津川作成)

年一月	支局：人物
1921	1 大阪支局：清水まつみ 在米：平井鳳扇
	4 大阪支局：播島種朗
	6 大阪支局：清水？
	8 大阪支局：清水、播島
	9 大阪支局：播島 ^{註20} 京都：清水
	11 京都 ^{註21} 井上朝鳥 名古屋支局：記載なし 浪花支局：播島 ^{註22}
	12 大阪支局：播島 京都 ^{註21} 井上
1922	1 大阪支局：播島 名古屋支局：宮瀬草之介 紐育通信員：林嘉世子 京都通信員：井上
	2 大阪日本橋支局：酒井喜詩 大阪西区支局 ^{註23} ：播島 大阪南支局：泉澤梧郎 京都通信員：井上 神戸平野支局：關なかを 名古屋中區支局：太田静波
	3 大阪南支局：泉澤、桐原春彦 大阪日本橋支局：酒井猶造 大阪西支局 ^{註24} ：播島 京都下京區支局：水口白雪 名古屋西支局 ^{註24} ：宮瀬 名古屋中區支局：太田 神戸 平野支局：關 小倉市外支局 ^{註25} ：中川一雄 呉市中通支局：平田宗雄、山本秀夫
	5 京都下京支局：記載なし 大阪日本橋支局：記載なし
	6 呉支局：平田 ^{註26}
	7 大阪南支局：泉澤、桐原
	11 大阪支社：泉澤
	12 神戸支局：なし 大阪日本橋支局 ^{註27} ：酒井
	1923
	1 金沢支局：小林あさじ
	2 大阪日本橋支局 ^{註27} ：酒井
	3 大阪日本橋支局 ^{註27} ：酒井
	4 呉第二支局：脇本竹雄 大阪日本橋支局 ^{註27} ：酒井
	5 広島支局：なし
	6 大阪日本橋支局 ^{註27} ：酒井
	7 名古屋支局：宮瀬
1924	7 支局を設ける告知のみ